# 第四章　日中アナキストの交流

## ——山鹿泰治・岩佐作太郎らのこと——

### (1) 劉師復を援助する

日中革命家の交流ということになると、すぐさま思い浮かぶのはアジア主義の宮崎滔天や北一輝の、中国革命家への援助である。本来国際主義のアナキズムにあっても、当然支流があったことはいうまでもない。そもそも東京・アナキストが生れた時点において、両者は連帯的であった。しかし直接中国に渡っての援助は一般にあまり知られていないが、小規模なりといえども現地協力があるので、そのことを記しておく必要があろう。

その代表的な存在は山鹿泰治の例である。（その生涯の記録を原稿枚数二千枚の『たそがれ



日記』として遺した。）山鹿は欧文活字工で、エスペランチストであるが、少年の頃大杉栄と接して以来、生涯をアナキズム革命に捧げることを決心したのである。体型的にもやせぎすで、体の軽いタチだったので、行動的であり、中国の同志との間にいろいろ交流がある。しかもその初めての協力において、かの師復（シフク）を援助したというから珍しい。

山鹿が師復と顔をあわせたのは、一九一四年六月のことであった。当時山鹿は大連の発電所で働いていたのであるが、そこへ大杉から連絡があった。上海でアナキスト兼エスペランチストの劉師復というのが、「民声」（ラ・ヴォーチョ・デ・ポポーロ）というエスペラント語と中国語のアナキズム誌を出し始めたから、行ってそれを手伝わないかということであった。彼はその話があるとすぐさま会社を辞めて、上海へ行く決心をした。山鹿泰治のこうした場合の決心と行動の素早さは定評があるので、それを見込んでの依頼であった。

師復の方は先に説明した如く、香港、マカオを追われ、上海に逃れて、秘密出版を行なっていた。この時期に山鹿は師復を訪ねたのであるが、印刷が本職で、エスペラント語が達者な山鹿には打ってつけであった。やがて上海に着くと、彼はすぐさま親類筋の山鹿洋行を足がかりとして、師復に手紙を出し、迎えに来てくれるよう頼んだ。師復の民声社の住所は判らなかったが、P・O・ボックスの番号宛で送った。

翌日、黒めがねに白手袋をつけた師復が店の方に訪ねてきた。店の連中は中国語ならばペラペラ話せるが、エスペラント語は少しも知らない。二人は安心してエスペラント語で会話を交した。話の途中、師復は何か山鹿のことを証明するものはないかというので、クロポトキンの『パンの略取』に別の表紙をつけたものを持っていたので、それを贈ってやったら、師復は喜んで、「民声社」の住所は秘密だが、君を信用するといってアドレスを教えてくれた。

次の日、教えられた通り上海の競馬場の右手の通りを進んで、郵便番号目当てに右へ折れた裏通りを行くと、すぐに判った。そこは静かな住宅地帯であった。家は高い塀に囲まれており、高い戸が閉まっていて、引手の金輪を打ちつけると小窓が開いて人の目がのぞいた。それで来意を告げると、その目はいったん消え、やがて戸が開いて師復が迎えてくれた。みると昨日とは別人のようで、黒めがねをかけていない。しかも右手はひじから下部がなくて、白手袋もはめていなかった。ゆっくり話を聞くと彼は、「自分はどこでもお尋ね者なので、外出する時はいつも変装して車に乗るのだ」といっていた。右手首がないのは、若い頃北京の悪官吏を暗殺するため爆裂弾を作っている際中、爆発して失ったのだといっていた。(このところはスカラピーノは、投げる前に破裂して、彼は左手の指全部を失ったと書いていて、記述が異なる。)

その際捕われて、獄中で勉強したことが大いに役立った。彼の著作に『伏虎集』というのが



あるが、これは中国社会民主党の江亢虎を駁論したもので、当時の中国読書界では随分広められた冊子である。

この秘密の穏れ家の入口の脇が印刷所になっていた。そこでは師復の妹の無為(ムッテ)、ヤウヨ・セウヨの三人の他に、若い女性十人、男性十人ほどが「民声」の組版・印刷・製本・発送を行なっていたのである。師復は広東で晦鳴学舎を設立するや、全財産を投じて印刷設備を購入し、学生達と共に上海へ移って来ていた。機械は手廻しの十六頁のロール一台、それと漢字とエスペラント語の活字が揃えてあった。山鹿は早速この地下秘密出版の仕事を手伝うことになったが、中でもエスペラント語のうまいのは二十いくつかの鄭佩剛(チョンペイガン)で、山鹿は当分鄭の助手ということになった。

時には、女ばかりで動かしている十六頁のロールの仕事を手伝った。動力をつけると近隣の人に悟られるので、シャフトを長くして、両側にプーレーをつけ、両方でハンドルを廻して、動かすようにしてあった。ところがこんな幼稚な印刷の仕方をしていても、出来上がりは印刷・製本共に立派なもので、とても地下出版のものとは思えなかった。技術については師復がやかましくいうので、みんなこの道では熟練工になっていたのである。

食事は一同二階へ集まって、洋食皿に盛り切りのめしと野菜と卵だけぐらいの簡素なもので

あった。民声社の連中は菜食主義で肉食しなかったのである。時たま同志から贈られたバナナやびわが出ることもあったが、米がなくて虫喰いのあずきの煮たものだけで済ますこともあった。菜食はともかく、煙草も酒も飲めないことには閉口した。それというのは金銭が乏しいことにもよるが、例の十二箇条の宣言に、みなが従っていたのである。

十二箇条のうち、「結婚しない」というのは、（多分）家を持たないという意味で、師復自身は妻と離別して、今度こそ真の恋愛による結婚をやり直すんだといっていた。「姓を名乗らない」は家名を捨てることを意味し、やはり家の否定を意味していた。読み方は北京音のシーフーをエスペラント式にOをつけて、シーフォと自称していた。師復はアナキストは如何なる意味においても民衆の先端たるべきものと信じ込んでいたから、これらの戒律を厳しく定め、実行してもいたのである。ただし他人には決して強制するということはなかった。それで、中には戒律を破るものもいたが、師復の前だけでも守らないわけにはゆかなかった。

この十二項目の〝戒約〟は、後にA・F（「無政府主義者連盟」）が結成された時にも、加盟者の宣誓の文句として使用された。この誓詞は中国語でやると、不食肉、不飲酒、不吸烟、不用僕役……と調子がいいので、じきに覚えられたということである。（当時、中国ではアナキストは「安那其」と呼ばれて、上に国名も地域名もつけないのが普通であった。彼らは文字通



り世界を一つのものとみて、国家や民族を認めていないことの現われであった。）

山鹿は印刷所へは通いであった。自分も宿泊させてくれるよう頼んだが、外国人がいると近所から注目されるからと断わられたのである。それで毎日家からは町見物にゆくとか何とかいって、数ヵ月間も通いつづけたのであるが、やがて持ち金の五十円も残り少なくなってきた。そこへ大杉から月刊誌「近代思想」に引きつづいて、日刊「平民新聞」を復刊するといってきたので、師復と相談した結果、それならば帰国して大杉を助けた方がよかろうということで、上海を離れることになった。

別れに際して山鹿は、持ち合わせの銀箔の扇面に潤筆を頼むと、「無政府者無強権也非擾乱也　克魯泡特金語　財産者臓物也資本主者盗賊也　浦魯東語　為山鹿愛友　師復」と書いてくれた。この扇面の文字は墨痕リンリとして鮮やかなもので、山鹿の生涯の宝であったが、戦後インド行の際旅費の必要から手離してしまった。後に聞けば、この書は、右手のない師復が筆で書いたものとしては、残っている唯一のものだそうである。写真だけは記念に撮っておいたものの、惜しいことをしたと思われた。

師復はその後、山鹿が去って九ヵ月余りして昇天した。一九一九年三月二十七日。肺病であったといわれている。しかし山鹿の自筆の記録（『たそがれ日記』）では、「肺癌」となっている

ので、あるいはその方が正しいのかもしれない。その際、同志達は入院費用もないところから（その頃にはもう南洋華僑からの送金も滞り勝ちであった）、印刷設備を売ろうとしたのであるが、師復はそれを知って、「世界でアナキストが所有する印刷所はここ一つしかないのだから、私が病死しても印刷機は売らないで運動をつづけてくれ」と遺言して逝ったそうである。師復の記念碑は（今も立っているかどうか判らぬが）、西湖の傍に建てられた。

### (2) 大杉の旅券を求めに

山鹿が、大杉の輩下である吉田一（通称ピン公）と二度目の中国行をしたのは、一九二二年（大正十一年）のことである。ただしこの時は、中国行が最初からの目的ではなくて、上海経由でロシアを訪ねるのが狙いであった。ところがそれが実現しなくて、スゴスゴ日本へ引返して来たのには理由がある。共産党の徳田球一に欺されたせいである。

山鹿が初めにロシア行を希望した時、一度ロシアへ行って来たことのある吉田は、よしそれならば徳田球一に旅費を出させると約束した。事実、山鹿が浅草の隠れ家で徳田に会って話をすると、徳田は近く上海へ金が来るので受取りにゆくから、その時に入用金は渡すといってい



たのである。だが、いざ吉田を連れて上海の連絡場所である楊樹浦（ヤンジポー）の家へ行ってみると、ユダヤ人夫婦が出て来て最近転居して来た許りで何も知らないという。いくら聞いてもダメで、しまいには怒り出す始末である。仕方がないので、バンドの公園へ行って毎朝連絡にやってくる朝鮮青年を張っていると、朝方一人でやって来た。当時上海では朝鮮仮政府のグループが、かなり活発に活動していたのである。青年に事情を話すと、直ちに彼は、「徳田さんは三月前に来たので、三千何百円かの金を渡しました。しかし君等の話は何も聞いていない……」ということであった。ここで初めて、自分達が徳田に欺されたことがハッキリした。それでやむなく、帰りの費用は何とか工面して、日本へ引き揚げて来たというわけである。

その時一緒に帰ったのは黄凌霜（黄興の甥）であった。黄は「近く渡米してマサチュセッツのクラーク大学へ留学する。ついては途中日本へ寄るから、大杉を紹介して欲しい。師復の死後創立したA・Fについても意見が聞きたいから……」というので、二つ返事で応じた。黄は日本では横浜の中国人学生の下宿に滞在して、大杉栄や後にテロリストとなった村木源次郎らと会い、いろいろ談合していった。

かくして二度目の上海行きは無益に終ったが、その後思いがけなくも同じ年の十二月に、またして中国行の秘密の用件が飛び込んできた。というのは、山鹿は日本へ帰って、芝の「アド

ヴァタイザー社」という印刷屋で働いていたが、そこへある日大杉が来て、「ベルリンで世界無政府主義者大会が近く行なわれるから、中国へ行ってパスポートを手に入れてくれないか」と相談を持ちかけてきた。大杉は日本ではとてもとれないし、中国人になりすまして出国する積りであった。話を聞くと山鹿はその日の夜汽車でもう、東海道を西に突っ走っていた。

山鹿の心積りでは、北京へ行けば盲目のエスペラント語詩人エロシェンコが北京大で講師をしているから、土地のアナキストとも連絡がとれ、何とかなると思ったのである。北京語は大連時代に習ったことがあるので、大体は間にあう。コースは、東京から下関に至り、朝鮮を経由して、奉天から京奉線に乗り換えてゆくのである。

北京へは六日目に着いた。城の濠は底まで凍っていて、ここで初めて、学校で習った濁音の入らないきれいな北京話（ペイチンホワ）を聞くことができた。北京大学は天安門を通って、北へ濠に沿って一キロほど行った、左の胡同（ホートン）（横丁）の奥の方だ。受付でエロシェンコの家を聞くと、すぐ判った。彼は城の北通りを西へ一キロほど行ったところの、周作人の家に同居していたのである。周作人というのは魯迅の実弟で、当時は北京大学のロシア文学の教授を勤めていた。妻は日本人で、エスペランチストでもあった。山鹿は周の家に着くや朝鮮人崔陽（ツァイヤン）と称して面会を求めた。出会って彼にエス語で話しかけると、大杉らと一度会ったきりなのに覚えていてくれ、積



る話に花を咲かせた。そこで事情を話して紹介を求めると、大学に近い闘鶏坑（トウチーカン）にエスペランチストやアナキストが集まって共同炊事している。その中に陳昆山（チェンクンシャン）というのがいると、教えてくれた。また「国風日報」の発行者である景梅九も、日本では幸徳や大杉と接した、アナキストであることがわかった。

早速いわれた通り闘鶏坑に出かけて、陳昆山を介して、景梅九に大杉の旅券のことを頼むと、快く中国人王松寿の名義で旅券下付願いを出す手続きをとってくれた。ところが当時は政界が混沌としていたし、例の中国式の漫々的（マンマンディ）（ゆっくり）から少しも話が進展しない。その間山鹿は毎月のように陳と景との間を往来する他は、昼間は、毎日北京大学の第二院で、エロシェンコが周作人の通訳でロシア文学を講義するのを聴講していた。

寄宿している陳の家では、夜は竹の床で寝るのだが、零下十五度の北京では寒くてなかなか寝つかれなかった。山鹿はもともと寒さに弱く、南洋の土地に憧れていたのである。めしは中国語で饅頭（マントウ）というメリケン粉でつくった蒸しパンだけであり、おかずは小皿に唐辛子を塩水で練ったものを、太い竹の箸の先にポッチリつけてなめるだけであった。麺（ミエン）といってひもかわうどんにすることもあるが、これは火が入用になるから三日に一度ぐらいしか喰べられない。便所はレンガが二つ置いてあるきりで、排便したものはすぐに凍りついてしまうから、後からお

わい屋が来てシャベルで削り取って片づけていった。

山鹿は景梅九を訪ね、講義を受ける以外は、盛り場へ出ていろいろ珍妙なものを見たり、喰べたりして、うろうろしていたが、これでは駄目だと判断すると、上海へ向かった。旅券の入手は、北京よりも上海の古い同志に頼んだ方が、早いと思えたのである。

上海へ着くと、すぐにフランス租界、霞飛路の華光医院の院長鄧夢仙に電話連絡した。この鄧夢仙という人は千葉医大出の医者で、日本人の女医を奥さんに持ち、日本から行ったアナキストの連中はたいがい世話になっていた。いつもニコニコしたえびす顔の好々爺で、実は大杉も鄧の紹介で、法界（仏租界）のイギリス人マダムの室を借りて待っていたのである。

大杉の旅券は北京ではとれないと連絡してあったので、着いてみるともうA・Fの同志達が手を打っていた。八方手をつくして努力した結果、ちょうどフランスのリヨンにある中法大学の校長が帰ったところだったので、その援助によって、広東省台山県の唐継という人物が留学するということにして、旅券が交付されることになった。ところが旅券の交付は決定したものの、それを受けとるには必ず本人が出頭しなければならない。首実験の上、直接フランス官憲から手渡されるのである。しかしパスポートの写真は本人のものが貼ってあるし、大杉が出向くわけにはゆかない。しかも船は、一月七日上海発のマルセイユ行「アンドレ・ルボン号」と



決っている。はたと困ってしまった。そこで、時はちょうど休日の多い年頭であるし、旅券は外務官の机の抽出しにあることが確かめられているので、某同志が中国流の忍法を使って忍び込み、拝借（？）してきてしまった。大杉はそれを持って（むろん写真は貼りかえ）、予定の日に上海を出発したというまでもない。（この後の大杉のフランスでの行動は、本人の『日本脱出記』に詳しい。）

大杉の問題が一段落した後の山鹿は鄧夢仙と、広東の王伯時と三人で、大みそかの晩にビラ貼りを計画した。中国では正月になると、各戸の門柱の左右に、聯という赤紙にめでたい文句を書いて貼りつける習慣がある。それに目をつけて、鄧の太い達者な筆で数百枚のアナキズムのスローガンを書き、夜半に糊とハケを持って至るところに貼って歩いた。そして最後に別にガリ版刷りのチラシをつくり、大馬路の永安公司と先施公司の屋上から、下の群衆へ向けて撒き散らし、上海を去る餞としたのである。

### (3) 上海労働大学

一九二七年八月、アメリカのマサチューセッツ州でイタリアのアナキスト、サッコとヴァンゼ

ッティが事実無根の強盗殺人罪で死刑を宣告された。そのために各国で救援のための運動がなされたが、日本でもアナキスト系の人々によって救援演説会が連日どこかで行なわれていた。その救援運動の真際中、上海から大井町の山鹿の宅へ入電があった。文面は、「ヤマガイシカワリヨウシヲシヨウヘイス　スグオコシマツ　シヤンハイ　キヤンワン　ロウドウダイガク」であった。石川とはむろん石川三四郎のことである。当時山鹿は英文日刊紙のメーカップ・マン（大組工）をやっていたが、演説会の方は一応他の同志に任せ、会社へ断りもせずにすぐに出発した。

この上海江湾站に新しく設立された「国立労働大学」というのは、目的は、学費無料で労働組合の指導者を養成しようというものであった。ただし内容には特色があって、アナキストが多く入り込んでいた。大学を実質的に創立したのは、日本とドイツで学んだ沈仲九という古いアナキストであって、その教師陣に多勢のアナキストを加えていたのである。しかも国内アナキストはいうまでもなく、外国である日本からも、岩佐作太郎、石川三四郎、山鹿泰治と三人の教師が招かれた。当時、蔣介石の国民党としては、拡大しつづける共産党との対抗上、理論面でアナキストの力を借りないわけにはいかなかったのである。

山鹿はすぐさま出発することにしたものの、日本を出ることが容易でない。そこで大阪の紙



屋の番頭に化けた。トランクの中には紙の見本帖やソロバン、ストック表等をつめ、体ごしらえも和服に角帯をしめ、金メッキの指輪をはめ、その上安ものの香水をプンプン匂わせる、といった念の入れ方であった。

上海楊樹浦の瑪頭に着くと、人混みに交って、素早くタクシーに乗り込み、「江湾車站　火急火急！」とせきたてて発車した。船の中にもスパイがいて、山鹿は内心もうヅケが廻っているらしいことを感じていたから、上陸しても気が気でなかったのである。約二十分、別に尾行してくる車もないようなので、安心して車の中で和服を洋服に着替えると、やがてある小駅に着いた。ここは上海閘北と呉淞の中間であった。線路の左側、すぐ駅前に「国立労働大学」のアーチがみえる。そしてアーチの両柱には、「各尽所能」（各々能力に応じて働き）、「各取所需」（各々欲求に応じてとる）とアナキズムの原理が大書してあった。

表門には歩哨の番兵が立っていて、報姓（報名）すると、すぐに沈仲九と張景が迎えにやってきた。沈は日本のアナキスト久板卯之助によく似ており、キリストのような風貌をしていた。張景は雲南の人で早稲田留学当時から幾度も面識ある人物だった。あとから石川さんも来るからと、大変喜んでくれた。岩佐老人はその以前に福建の軍官学校に協力していたので、直接労大の設立に協力していた。授業課目は岩佐＝フランス革命、石川三四郎＝社会主義講座、

山鹿＝エスペラント語となっていた。エスペラント語は労大の必修課目であった。

岩佐作太郎が沈仲九と出会った最初の時には、「共産党に対する対策として、何をおいても唯物弁証法を撃破せねばならない。あわせて国民党が孫文を偶像化し、三民主義をお題目化しているから、一日も早くアナキストの闘士を養成し、社会革命を達成しなければならない」と語っていた。そこには明瞭に、アナキズム大学の志向があったのである。

全国から（日本留学生からも）集められた青年男女七百余人の前で紹介された山鹿は代って着任の挨拶をエスペラント語で一時間半もやった。終ると、校内の工廠を案内しましょうということで廻った。大学の建物はもと遊民の授産所だったものを利用したもので、校内には印刷・製本・織布・鋳鉄・毛氈（もうせん）等の施設があった。農場もあった。それらの工廠で出来た製品を売って、学校の経費の一部に当てていたのである。山鹿の専門の欧文植字室に入ると、フレーム（植字架）が十許りあった。鉄工廠では兵隊の午棒剣を造っていたし、毛氈工廠では甚だ原始的なやり方で、女学生達が模様を織り出していた。山鹿は早速エスペラント語の教本をつくらせ、男女四組の学生達に分け与えて授業に入ることにした。

概して山鹿の労大での生活は快適なもののようであった。エスペラント語を教えるのに歌を使ったり、学芸会をやったり……。エスペラントの方にはその後、社会学者の陳声樹（チェンションシュ）という



人がきて同室になったので、毎日エスペラント語で愉快に話しあった。また九州大学医学部出身のエスペランチスト祝振剛（ジュジェンガン）という人が、労大の校医としてやってきてくれたので、彼とも親しくなった。できた許りの労大へ中国アナキストの大先輩李石曽がやってきた時には、石川三四郎もパリで見知りあいであるから、盛大な歓迎会を催した。思いがけないことといえば、師復の弟子の佩剛が師復の妹の無為（ムッテ）と結婚して、労大の傍らの西門（シーメン）に居たことである。二人はその時も民声社時代の印刷機を使って、『中エス辞典』の組版をやっていた。

しかし労大の内部は出発当初はともかく、次第に雲行きが怪しくなってきた。なぜならもともと労大は国立であるし、創立と同時に沈仲九は校長を辞退して、国民党の易培基がなっていたから、アナキストはどうしても拘束を受けざるを得ない。ある日、岩佐が学生を集めて講話している際中、三民主義の批評をやっていると、たちまちそれが知れて、丁寧ではあるが、命令的な口調の、中止してくれという伝言があった。

むろんそういう状勢に対し、アナキストの教職員は抵抗した。学校では毎日始業前に、国父孫文の遺嘱（いしょく）を書いた紙切れの前で、三鞠礼拝というのをやらされるのであるが、アナキストだけはやらないで通した。そのために国民党教師との間にいざこざが起ったのは当然である。しかし学校の経営権が国民党にある以上、余り無茶もできない。時折、巡査がクロポトキンの

肖像を、マルクスと間違えて没収しようとするのを捕えて、苛めて喜ぶぐらいが関の山であった。

ここにおいて、岩佐は労大のような在り方に大いに批判的なのである。「妥協は遂に敗北であり、ただの犠牲であり、みのりは遂にないものである。」(「平民新聞」) 今、自分たちの苦心が報いられて国立大学ができた。これは世間的にいえば大変喜ぶべきことのようにみえる。しかし国家の力に依存し、政府の力を利用するのでは、結局自分自身を絞殺させることに他ならない。(その例は、スペイン共和政府に参加したCNT〈アナキスト系の全国労働者連合〉の末路にもみられよう。) 自由とは常に闘いとるべきものであって、妥協にはない。労大の隣りには、南洋華僑の建てた保守的な「立達学園」というのがあったが、こちらの方がかえって自立的であるが故に、内容は開放的であった。学校では孫文礼拝はないし、三民主義の批判でも、アナキズムの講義でも、何でもできた。いわば労大とは逆さまだったのである。

そうした岩佐の純粋な批判は確かに、その限りでは当っていたので、その後国民党の拘束はますます強まっていったのである。それがいやで、副校長の沈仲九はやがて退職し、欧州への旅に立った。(山鹿の記録では台湾へ去ったことになっている。) 張景も郷里の雲南へ引揚げた。沈は途中、東京へ立寄り、留学中の衛安仁・張易(張景の弟)・毛一波・索非並びに日本人



の近藤憲二や小池英三らと会い、懇談している。山鹿自身はそれよりも早く、その年の十二月に帰国したが、労大には約半年間滞在した。山鹿の場合は、まだ居たい気分はあったのだが、日本にいる妻が借金のことをうるさくいってくるので、一稼ぎしてくる積りでいったん帰ってきたのである。労大そのものは、上海事変の際に、日本軍に抵抗し、校舎はすっかり焼き払われてしまった。

### (4) 泉州・民団訓練所

岩佐作太郎がアモイから唐時代の古都泉州に向かって航行していたのは、一九二八年秋の末であった。同行者は、徴兵されたものの出兵先の中国で脱走した、アナキスト赤川啓来、資産家の若きアナキスト染竜光の二人であった。彼らは泉州に着くと、染氏の商館興隆号で接待を受け、それから約二キロ先の目的の福建省民団訓練所へ辿り着いた。当時福建省には李済深(?)の海軍と国民政府の十一路軍とが、同じ場所で勢力を競っていた。その間にはさまれて、民団訓練所が活動を行なっていたのである。民団は創立されてまだ数ヵ月しかたたないのに、すでに泉州区を中心に五県にまたがり影響力を及ぼしていた。

民団訓練所とは、文字通り人民のことは人民で解決する。自分のことは自分でやる、という無政府主義の理想を実現するための民団の闘士を養成する場所であり、軍隊でいえば軍官学校のようなものであった。訓練所の生徒は百人足らず、軍隊の方は三百人を出なかった。鉄砲の数に至っては士官の数ほどもないようであった。だが民団の生徒たちは到るところに遠征して、著しい効果を収めていた。泉州の知事や裁判官の如きは、難題の解決には十一路軍にも海軍にも謀らず、民団訓練所の方へ持ってくるようになっていた。民衆と商業組合も信頼を寄せて、家庭争議から仔豚を盗まれた話まで持ち込んでいたのである。

民団の中心人物はまだ四十に足らない壮年アナキスト、泰望山といった。彼は非常に多忙で訓練所にいることが少なかった。事務の方は、二十二歳の青年少将李という人が当っていた。李は年少にして将官になっただけにどことはなしに勝れており、寸時を惜しんで読書に努めていた。後に彼は労働大学に入学して、上海事変の時には、労働大学の総大将として日本軍と戦ったといわれる。

泉州は革命以前までは二十万以上の人口を持ち、賑やかな町であったといわれる。それが今は政府と称する馬賊どもの掠奪誅求にあい、海外に移り住むもの続出し、人口僅か五万人にまで激減していた。戦争のため痛めつけられた住民たちは、つくづく政府というものが当てにな



らないものであることを痛感していた。だから「自分達のことは、自分達で解決すべきである。民団を組織し、民団の力で自由と平等の社会を創りあげなければならない」という訓練所の青年達の叫びを、暗夜の灯のように感じたのである。「日出て働き、日入りて憩い、井を穿って飲み、田を耕やして食う、帝王なんぞ我に関わるところあらんや。」もともとこの辺の住民は自分達自身の治安維持のため、部落の入口に、高い堅固な見張兼防禦の高塔を建てたりしていたので、訓練所主旨とあうところがあった。

ところがこうした民団訓練所の運動は、政府の喜ぶところでないことは当然である。海軍にとっても、十一路軍にとっても目の上のたん瘤的存在で、スキあらば弾圧しようという魂胆であった。それがそうならなかったのは、海軍と十一路軍が互いに勢力伯仲でにらみあっていたせいである。

むろん民団訓練所の方でも、そうした自分の位置をよく知っていた。それで武装力を高めるためにしきりと武器を欲しがっていたのである。「鉄砲だ！　鉄砲だ、機関銃だ！　機関銃が四、五丁、鉄砲が二、三千もあれば、兵隊の二万や三万、いや十万だって相手とすることができる。」しかもそれを入手するための資金はふんだんにあった。華僑達がいくらでも必要なだけ金は出すといっていたからである。問題は、入手の方法であった。

ところがその肝心の武器も満足に整わぬうちに、容易ならぬ事態がやってきた。昭和四年の晩春かあるいは初夏の頃であったろう。共産軍が福建省境をおびやかしていた。その勢いは猛烈で、政府軍は連戦連敗、毎日のように今日はどこが占領され、明日はどこに進出するであろうなどといわれていた。泉州の十一路軍も、すでに討伐に出かけたとの噂がもっぱらであった。そうしたある日、岩佐が自分の室で読書にふけっていると、国民政府軍が敗退して共産軍が泉州近くまでやってきたという、コソコソ話を耳にした。それで戦争を見たことのない岩佐は、ぶらりと一人外に出てみると、帽子のない兵隊や、たまには疲れて足が先に出そうもない兵隊に出会うことができた。そして訓練所の方へもう一度引返してきた時に、門前の人々がいつにない動きをしていて、岩佐をみつけると、すぐさま有無をいわせず自動車の中へ押し込んでしまった。

「どうしたんです?」と聞くと、「総退却です。あなたを探していたんです」と応える。「敵の片影さえ見えず、鉄砲の音さえ聞えないのに退却するとは何です」といってみたが、ムダであった。車はじきに動き始めた。

この民団訓練所の退却は、後で聞いてみると、共産軍のためではなく、むしろ十一路軍が海軍を気にしての微妙な動きに伴う、同時的な移動であった。こうした中国人の、直接闘わずして退却する遠謀な動きには、日本人の目には謀り難いところがあった。岩佐にしてみれば、いささか風声鶴唳の感なきにしもあらず、というところであった。

民団は十一路軍と行動を共にしたが、目的地のアモイへ着いてみると、土地の官憲は十一路軍の上陸のみ許して、民団の上陸は許さないのである。止むなく民団はそのまま航行をつづけ、某地に上陸した。しかしそこにも落ちつくことができず、新しい決定がなされた。全隊を二隊にわけ、本隊は兵隊と共に山獄地帯にたてこもる。その間に、再び泉州へ戻る機会を狙うのである。他の隊はその時に至るまで自由行動ということになった。

それから一月ほどして全隊が元の訓練所へ帰った時には、施設はまるで破壊しつくされ、掠奪されていた。しかし総商会の方が自分達の本拠を直ちに引空けてくれ、岩佐が後から行った時には新しい場所に移っていた。

帰還してからの訓練所は、以前にもまして精力的に活動した。アモイの総領事坂本竜起は「必要ならば奥地までも踏込む」などとおどかしていたが、それを馬耳東風で聞き流して運動をつづけていたのである。だが同じ土地に陣取っている十一路軍にとっては、邪魔なことである。(当時海軍は去っていた。)ちょうどその時、日本人船員が民団訓練所に捕まり、それを十一路軍が引渡要求して拒んだ事件が起きた。そんなふうに軍との間にいざこざが多くなると、

両者の間は危険なものになってきた。そして遂に来るべきものがきたのである。南京の国民政府が民団訓練所へ向かって、解散命令を発したのである。

解散命令の理由は簡単であった。政令二途に出づるはよろしくないというのである。福建省を支配するものは当然私的な民団訓練所ではなく、国民政府軍の十一路軍でなければならない。いわば民団訓練所は国家内の国家みたいなものであって、存在を許すことができないのである。中央集権的な革命者は、絶えず歴代王朝と同じ態度をとる。フランス大革命の当時、ジャコバン主義者は、フランス全土に勃興した革命の生命である〝民衆協会〟を国家内国家として弾圧したし、ロシアでも〝ソヴィエト〟を扼殺して、革命を中途半端なものにしてしまった。今同じことを国民政府がやろうとしているのである。

微力な民団訓練所はむろん抗争した。しかし強力な軍事力を持つ十一路軍に、対抗できる筈がない。解散せざるを得なかった。

岩佐作太郎は民団訓練所が解散させられると、ごく少数の兵隊に守られて、しばらくアモイ島の近辺に潜伏していた。しかしそのうちに済南事変が起きて、日本へ帰らざるを得ないハメになった。日本側の要求は無理難題で、中国人ならば三歳の童児に到るまで憤るほどであったが、その要求の中にアナキスト岩佐作太郎の引渡しも入っていたのである。岩佐の同志であり、蔣介石の懐刀でもある張人傑は一日も早く、欧州かどこかへ脱出するようにいっていた。そこで岩佐はその日のうちに南京から上海に出て、そこの同志の助けを得て、飄然と日本の神戸へ上陸したのである。



### (5) 中国のエスペランチスト

アナキズムは世界主義を標榜するところから、ザメンホフの創めた人工国際語エスペラントと容易に結びつくのであるが、とりわけ中国の初期社会運動では重要視された。エスペラント語は中国では「世界語(シーナエイ)」と呼ばれ、最初にそれを入れたのは師復だとされている。一九〇六年師復は日本から戻るとすぐに、エスペラント語学校を始めた。教わったのは景梅九と同じく大杉栄だと思われる。その二年後、陸式楷(ルーシーカイ)という人が上海エスペラント学校を創設した。一方同じ年にフランスのリョンから帰国した許論博(シュルンボ)という人が、広州でいくつかの講習会を開いている。一九〇九年には、中国最初のエスペラント団体である上海世界語学社が誕生した。

一九一二年(民国元年)五月、中国世界語会を改組して中華民国世界語会とし、その中央事務所を上海に設けた。陸式楷と盛国成(シャングオチョン)が世界エスペラント協会の正副代理員となった。一九

一三年に中華民国世界語会は、上海に世界語高等専門学校を開いた。広州で「民声」が発刊されたのはこの年の八月二十日である。

こうしてすべり出した中国のエスペラント運動は、一九二一年に広州で第七回全国教育会聯合会が開かれた際、エスペラント語を全国師範学校の正科に組み入れ、漸次一般の学校に及ぼすという決議案が採決されて飛躍的に発展した。ここに至るまでには、同盟会以来の古い革命党員である北京大学学長の蔡元培の力が大きかった。また同じく一九二一年に北京大学では、エスペラントを必修課目としている。翌年からは「危険分子」として、日本を追放された盲目の詩人ワシリイ・エロシェンコが教授としてやってきた。当時北京大学には魯迅・銭玄同・周作人らの教授がいて、彼らは積極的にエスペラントを支持していたのである。そして一九二四年には、北京世界語専門学校の成立をみるに至る。

以上が初期エスペラントの動きであるが、これだけをもってしても中国近代史におけるエスペラントの位置の大きさが計り得よう。周知の通り、中国では漢字のために民衆は大いに苦しんできた。漢字は象形の段階にとどまっているために学習に困難であり、したがってまた教育の普及をさまたげた。その特殊的事情にあぐらをかいて、読書人の地位は守られてきたのである。しかしそこから漢字の改革運動が始まり、一九一八年国学者である銭玄同は漢字を廃止し



て、エスペラントを採用すべきであるとまでいっていたのである。

山鹿は同じエスペランチストとして、これら中国エスペラントの運動家達と深い交流を持っていた。かの師復との関係は前述した通りであるが、それを継いだ陸式楷とも見知っている。この陸式楷という人は甚だ個人主義的なところがあって、手紙を交換し、上海へ行くたびに会っているのに、決して家へ招くということをしなかった。また美青年の盛国成は林業技師で、北京路に立派な屋敷を構えていた。陸式楷、盛国成は共に師復と友人関係にあったが、別にアナキストということではなかった。往々にしてアナキストはエスペラント語を学ぶが、エスペランチストは必ずしもアナキストではあり得ない。

南華学校という、寺子屋式の小学校を貧民窟で開いていた華南（ファナン）という人がいた。エスペラント語は下手だったが、親切な人であった。赤貧洗うが如き中で、山鹿と吉田一を招いてくれ、小さな腰かけの上に寝かせてくれた。よほど済まない気がしたのか、その後二人は北一輝の仲間の有垣路の永田病院へ転がり込んでから、僅かにしろ謝礼を持っていっている。

師復の弟子の佩剛を上海でみつけたことは先に述べたが、彼は戦後は広東へ戻り（一九六五年現在）、『中国アナキスト史』を執筆しているという。多分本人かマカオの同志から連絡があったものであろうが、山鹿の記録には「中共政府もその出版を了解して許すとのことだから、

早晩マカオに居る旧同志らの手で出ることであろう」とある。そうしたまとまったアナキズム史の刊行は今のところ聞いたことがないが、アナキズムの直接体験者の通史があれば、大変有益であることはいうまでもない。

中国で最も古い歴史を持つ出版社である、上海商務印書館の胡愈之（アーユーチ）という人はうまいエスペランチストであった。胡愈之はエロシェンコが上海につく前の年（一九二〇年）、上海世界語者協会を創立している。エロシェンコが上海へ渡り、世界語学校の先生をしていたのも彼の世話によるものであった。（商務印書館にはその他に汪馥泉という達者なエスペランチストがいた。）この胡愈之の自宅を、吉田一を連れて訪問した時には、珍しい食事を御馳走になった。大きな朱塗りのたらいに水を張り、青々とした菱の実を浮かせて、それをナイフでむきつつコリコリ白い実を喰べるのである。それは熱い上海の夏にふさわしい風物詩とみえた。

革命後、胡は中共の主要人物になったと聞いた（一九五六年現在、北京政府政務院文化教育委員会委員、出版総署署長、中国人民外交学会副会長）。それで山鹿はインド訪問の帰途香港で脱出して、中国をみようと思って、インドから北京へ手紙を出したが、香港には連絡がなかった。しかし一九六一年作家の巴金（パチン）が東京へやってきた時には、返事が委託されていて、あの時は手紙の配達が遅れて残念だったとあった。



巴金といえば、日本では大変馴染みの多い作家であるが、本名は李芾甘（リーペイカン）といって、古いアナキストである。そのペンネームの巴金は巴枯寧（バクーニン）の巴と、克労抱特金（クロポトキン）の金とをとってつけたものである。その著訳書は数多くあるが、生前山鹿さんのお宅へ伺った際に、棚に、ギロチン社の古田大次郎『死の懺悔』の巴金訳が置かれてあったのが、妙に印象的であった。巴金が戦後最初に日本へやってきた時には、丸の内会館で会って話をすることができた。しかし周りを役人らしいのが取巻いていて、親しく語りあうことはできなかった。その時香港の馬世倅（マーシム）から取次を頼まれた手紙を持っていったのだが、渡せなくて、彼の宿舎である東急ホテルの室へ置いてきただけであった。

「国風日報」の景梅九とは、大杉の旅券のことで何回も会った。景は昔日本に居た時、劉師培らと漢文誌「衡報」（平等の意）を発行して、日本から追放された人である。帰国後国会議員となり、議員の地位を利用して「国風日報」の社長に納まった。山鹿によると景は阿片吸飲患者で、性格破綻者みたいなところがあったという。この寒い北部大陸では、土地柄からも性の解放が求められるのは自然であった。A・Fのメンバーも男女平等を原則として、結婚という規範にしばられることなく、自由に性を愉しんでいるかのようであった。噂では景は阿片中毒のせいもあって、手当り次第に周囲の女性と関係を結んでいるということであった。ただし独

占するということを知らず、旧道徳や習慣にまるで囚われていないところが、人間的に魅力があった。

古いサンジカリストの蘆剣波（ルーチエンポ）は長い間結核で苦しみつつ、中共政府に軟禁されていたが、今（年不明）は四川省成都の四川大学の史学教授に落ちついている。ciciomar というペンネームを持つ葉君健（イエチュインチエン）は一九三一年、東京へ遊学し、エスペランチストの島津徳三郎らと会っている。彼にはエスペラント文小説『忘れられたる人々（フォルゲッテイ・ホーモイ）』というのがあるが、この小説はパール・バックの『大地』にも似て立派なものであった。また巴金と共にエスペラント文雑誌「緑光」を出していた作家の王魯彦（ワンルウイエン）とは、北大の陳昆山のところに下宿していた時に知っている。彼とは一緒にエロシェンコの講義に出たり、北京の街をうろつき廻ったりして仲がよかった。その頃の北京では夜になると、家々で胡弓や琵琶を弾きならして愉しんでいた。王は琵琶のなかなかの名手で、寒夜中国に伝わる名曲を奏でてくれた。

このように山鹿泰治の中国エスペランチストの想い出はつきない。ところで現革命中国におけるエスペラントの地位といえば、依然として高い。毛沢東自身がエスペラント語の必要性を認めているので、中国は事実上世界で一番エスペラントの盛んな国とされている。現在世界語協会の会長は全国人民代表大会常務委員会委員の要職にある胡愈之、副会長は文字改革委員と



しても活躍している葉籟士である。すでに二十余年間も国情を紹介している月刊「エル・ポポーラ・チニーオ」（「人民中国報道」）があり、別の機関である外文出版社のエスペラント課からは、毛沢東著作集、魯迅作品集その他、今までに二百種あまりもの読みものが出版されている。